https://jacobin.com/2026/01/amsterdam-ploeg-vonk-electoral-politics

■アムステルダムでは左派が自転車で権力を握るかもしれない

ビジェイ・プラシャド

長年にわたり選挙活動の場外で組織化を進めてきたアムステルダムの新しい左翼団体が、市議会選挙に立候補した。指導者たちは、運動には抗議活動だけでなく、権力も必要だと主張する。

2022 年 10 月 12 日、アムステルダムの 1492 人民法廷で行われた先住民解放記念日に出席したクリス・カスパー・デ・プローグ氏。（オスカー・ブラク提供）

アムステルダムはかつて世界有数の首都として栄え、アメリカ大陸やインドネシア諸島といった遥か彼方まで、貿易と征服のために大型船が出発する地であった。街のいたるところに、その歴史、すなわち帝国時代の名残が残っている。しかし、かつての壮麗さは今ではやや古びて見え、公共サービスへの投資の減少と政治指導者への広範な失望が、この街を特徴づけている。

アムステルダムのあちこちには落書きがあり、それらはまた、昨年オランダ政府によるイスラエルのパレスチナ人虐殺への支持に反対して 25 万人が参加した大規模デモや、その後アラブ人の死を叫びながら街を荒らしたマッカビ・テルアビブ支持者たちのフーリガン行為を想起させる。

壁に描かれ、あるいは擦り切れたポスターに記されたこれらの痕跡は、世界における自らの立場に不安を抱く都市の物語を語っている。港には今も大型船が停泊しているが、それらはもはやオランダの支配下にあるわけではない。これらの船は、東アジアはもちろん北米など、他地域から吹いてくる貿易の風に翻弄されている。アムステルダムは今なお港湾都市ではあるが、現在では主として観光都市となっている。人口 100 万人に満たない自治体でありながら、年間 2,000 万人以上の観光客が訪れる。

クリス・カスパー・デ・プローグは 1994 年、ソ連崩壊から数年後、港に停泊していた工業製品積載船がヨーロッパの消費者よりもアジアへの航海を多く行うようになった時代に、この地で生まれた。彼は生まれるのを待ちきれず、アムステルダムの多くの運河の一つに隣接する高層マンションで、母親は陣痛開始からわずか数分で彼を出産した。

30 年後、私たちはその建物の中にいる。かつて親友が住んでいたアパートの中を彼は駆け回りながら、幼少期の思い出を生き生きと語っていた。インドネシアやスリナムといった旧オランダ植民地からの移民、そしてモロッコやトルコからの出稼ぎ労働者に囲まれた、幸福な幼少期であった。日曜日には、母親

が経営するアルメニア人学校に通っていた。強い正義感を植え付けられた両親に育てられた彼にとって、アルメニア人とセファルディ系ユダヤ人の混血家庭に生まれたことは、大きな支えとなった。彼自身の家族史に刻まれたジェノサイドの記憶は、彼の意識に生々しく刻印されている。

クリスは、かつて住んでいた建物の中で、自らが築きたいアムステルダム像について語った。それは「ジェノサイドのない」アムステルダムである。「Booking.com のように、ジェノサイドに加担している企業を排除する。ブラックストーンのように、私たちの家を買い漁っている投資ファンドも同様だ」と彼は述べた。ここで言う「私たち」とは、オランダの新左翼政党「デ・フォンク（The Spark）」を指す。彼らは 2026 年のアムステルダム市議会選挙に候補者を擁立する予定であり、デ・プローグはこの選挙で同党の党首の一人として名を連ねている。

●学生には夢を見る権利がある

クリスがアムステルダム大学に入学した 21 世紀最初の 10 年間、戦争とグローバリゼーションの矛盾がヨーロッパを直撃していた。「対テロ戦争」において新たな「グローバル NATO」に加わったヨーロッパ諸国は、主としてアメリカ合衆国によって引き起こされた凄惨な戦争に、ますます深く巻き込まれていった。クリスのような若者たちは、冷戦後の世界で NATO が帝国軍へと作り変えられ、戦争の文明社会に生きているかのように感じていた。

ヨーロッパの一般市民は、これらの戦争と軍事費の増大、そして企業がほとんど税負担なしに事業を行えるという特権の代償を支払ってきた。オランダの場合、とりわけアムステルダムのザイダス地区は、世界中で脱税を行う郵便ポスト企業の拠点であり、同時にイスラエルへの主要投資家でもある。若者にとって、これは大学費用の負担増と、学位取得後も不安定な職に就くことを強いられる状況を意味していた。

2015 年、戦争とグローバリゼーションが生み出した諸矛盾は、近年のオランダ史における最も重大な反乱の一つとして噴出した。アムステルダム大学当局は、キャリアに直結する専攻分野に資源を集中させる計画「プロファイル 2016」を発表し、人文学系学部を大幅に削減した。学生たちは組織化し、人文学部の建物であるブンゲハウスを占拠した。11 日間の占拠の後、彼らは大学の行政中枢であるマーグデンハウスも占拠した。学生とそれに賛同する教員たちは、「デ・ニューエ・ユニバーシティ（新大学）」「RethinkUvA」、さらにマーグデンハウス占拠中には「ユニバーシティ・オブ・カラー（色彩大学）」と呼ばれる集団を形成した。

▼「連帯はもはや単なる考えではなく、実践となった。それは人を養い、疲弊させ、変革させるものだった」とクリスは当時を振り返る。

マーグデンハウスの外には「脱植民地化なくして民主化なし」と書かれた看板が掲げられていた。クリスと弟マックスは占拠に深く関与していた。2 か月近くにわたり、管理棟は自主的な実験場と化した。学生たちは集会やティーチインを行い、寝袋で寝泊まりしながら、議論と音楽に包まれて過ごした。彼らはそ

こで、自らの未来、そして地球の未来について議論した。あらゆる問題が議題に上り、当時クリスは、大学が「企業経営者に支配され、不平等の工場と化している」と語っていた。

大学で生まれたアイデアは国中に波及した。当時のオランダは、予算削減と階層的管理主義に苦しめられていた。例えばマーグデンハウス占拠の際には、ホームケア労働者が学生から学び、オス市庁舎占拠へと至る契機を得た。

学生たちは、大学に対する階級的攻撃を強く意識していた。同時に、政府が知識を抑圧された人々に対する武器として用い始めたことへの不安も高まっていた。ユニバーシティ・オブ・カラーは、より進歩的なカリキュラムを要求し、イスラエルに対するボイコット・投資撤退・制裁（BDS）運動の原則遵守も求めた。「連帯は単なる概念ではなく、実践へと変わった。それは学生たちを養い、疲弊させ、変革させるものだった」とクリスは回顧する。

●民主的な親密さを築く

オランダの政治は深刻なフラストレーションを抱えている。長らく左派や中道左派の伝統を持ってきた政党、たとえばグリーンレフトや労働党は、いまや NATO と新自由主義の擁護者となっている。一方で旧来の右派は急速に右傾化し、公然と人種差別主義と帝国主義を標榜するようになった。大きな反響を呼んだ学生リーダーにとって、オランダ政治の主流にはもはや居場所がなかった。そこでクリスは、兄や仲間たちとともに、政治教育と運動構築を目的とする草の根反植民地主義ネットワーク「アラレス」を設立した。彼らは、切実に新しい政治勢力を必要としているこの国で、新たなタイプの政治主体を形成するというプロジェクトを構想していた。

パレスチナでのジェノサイドが新世代を目覚めさせるはるか以前から、彼らはさまざまな運動、グループ、コミュニティを結集し、国際的連帯の実践を基盤として活動してきた。「バンドン精神に則り、脱植民地化とは単なる多様性や包摂性ではなく、戦争、帝国主義、搾取への反対を意味することを明確にするため、年次会議を組織し始めた」とクリスは語る。アラレスは、世界中の抑圧された人々との連帯を通じて、反植民地主義と労働者階級闘争の歴史に遡るオランダの「抵抗の文化」を刷新しなければならないとデ・プローグは主張する。これは単なる批判的プロジェクトではなく、政治力の構築を目的とした実践でもあった。彼らは、さまざまな運動の活動家を対象に、スキルと戦略的思考を鍛える研修プログラムを立ち上げた。

「至る所で、人々はシステムに亀裂を生み出している。そして、その亀裂は物語を語っている」とクリスは言う。こうした亀裂に耳を傾けるため、クリスと弟は、学生が運営するカフェ兼映画館「Studio/K」を政治的な空間へと変え、市内外の数十の草の根団体と連携した。その中には、地元の住宅闘争に焦点を当てた団体から、コンゴとの連帯を支援する団体まで、多様な組織が含まれていた。これらの Studio/K の夜会では、アムステルダムにおける運動の闘争のパリンプセスト全体が、ドキュメンタリー、詩、音楽、そして夜更けまで続く対話を通して浮かび上がった。

▼信頼はあらゆる政治プロジェクトの鍵である。たとえ小さな政治的相違が生じたとしても、対等な関係を築き、それを維持するために不可欠なのは信頼関係である。

クリスは Studio/K を離れた後も、「アーツ・オブ・レジスタンス」の枠組みの中で長年にわたり活動を続けた。アーツ・オブ・レジスタンスは、芸術を大衆政治の手段として活用する集団であった。このグループは、イラク出身のイギリス人ラッパー兼活動家ロウキーや、故フェラ・クティのギタリストであるキアラ・ンザヴォトゥンガなどのアーティストを招聘した。

アーツ・オブ・レジスタンス、Studio/K、そしてアラレスは、異なる組織や運動の人々を結集し、そのあいだに民主的な親密さを築くことを目的としていた。信頼はすべての政治プロジェクトの基盤であり、この対等な親密さこそが、たとえ小さな政治的相違が生じても、つながりを維持する力となる。小さな違いよりも大きな闘争が存在し、左翼社会の再構築というこのプロセスは、アムステルダムがまず BIJ1、そしてデ・フォンクの出現に備えるうえで、計り知れない役割を果たした。

●デ・フォンク（The Spark）の起源

BIJ1 は、テレビ・ラジオ司会者であるシルヴァーナ・シモンズによって 2017 年に結成され、反人種差別政策を掲げて選挙に挑んだ。党名は当初「Artikel 1」であり、人種差別を禁じるオランダ憲法第 1 条に由来している。党の初期形態は、オランダの旧植民地とつながりを持つアフリカ系オランダ人コミュニティ、そして程度は異なるものの、「対テロ戦争」の影響を強く受けていたイスラム教徒移民コミュニティに根ざしていた。シモンズはそれ以前、2015 年にトルコ系オランダ人のトゥナハン・クズとセルチュク・オズトゥルクの両下院議員によって結成された政党「デンク」のメンバーであった。

BIJ1 という名称は旧党名に由来するが、その発音はオランダ語で「共に」を意味する「ビジェーン」である。BIJ1 は概ね左派であったものの、世界情勢やオランダの国際的立場について、明確なイデオロギー的一貫性を欠いていた。この不統一は絶え間ない党内対立を招き、全国の議員 8 人のうち 7 人が離党または追放された。その中には、2025 年初頭にシオニズム色の強いキリスト教政党「クリステン・ウニエ」に移籍した議員も含まれている。

2024 年、デ・フォンクは BIJ1 との分裂を経て誕生した。その主な動機は、新グループの結成メンバーが大衆路線を追求し、左派の大衆政党を樹立したいと考えたことにあった。彼らは、アムステルダム大学最大の学生政党である活動家党（Activistenpartij UvA）や、旧体制の社会党に対する不満から生まれた革命社会党（Revolutionaire Socialistische Partij）など、市内の複数の小規模左派組織を統合した。革命社会党は 2021 年、左派的路線を掲げた青年部を全党除名し、2018 年から 2022 年にかけては、マルク・ルッテが率いる右派の自由民主人民党（VVD）とともにアムステルダム市政を担っていた。

広義に定義したとしても、オランダ左派は歴史上最低水準にあり、議会に占める議席は 20%に過ぎない。議会左派に確固たる基盤を持たないデ・フォンクは、これまで政党にまったく信頼を置いてこなかった人々を引きつけ始めている。クリスのように、人生で初めて政党に参加する者も少なくない。このグループは、選挙活動以前から長年にわたり地域運動のプラットフォームとして活動してきた経験を基に、住

宅宣言、ムーブ宣言、ライダー憲法、賠償宣言、反イスラム恐怖症宣言、黒人宣言、BDS 要求など、各運動の綱領を自らの要求の中核に据えている。

▼デ・フォンクはこれまで政党にまったく信頼を置いていなかった人々を引きつけ始めている。

デ・フォンクは、無料の公共交通機関、大規模な公営住宅建設、手頃な価格のグリーンエネルギーと食料生産、貧困を撲滅しつつ都市の緑化を進める抜本的な都市改革を提案している。これらの財源は観光税と固定資産税の引き上げによって賄う構想だが、彼らはそれにとどまらない、より根本的な改革の必要性を強調している。

ホームレスの数よりも空き家の数が多いこの街において、富裕層や権力者からの財産収奪は不可避であるように見える。こうした目標を達成するには強固な組織力が必要であり、彼らは市議会での立場を、街の運動を強化する手段として活用しようとしている。その基本姿勢は、選挙公約に明確に示されている。

「したがって、私たちは党として革命路線を貫かなければならない。ハーグやストーペラではなく、街の声に耳を傾ける。私たちの忠誠は、公正な世界のために日々闘う運動に向けられている。あらゆる地域活動、そして最善を尽くして生きるアムステルダム市民に対してである。私たちはこれらの運動の有機的な一部であり、単に議席獲得だけを目的とする政治機構ではない。」

●傷の世界

2026 年半ば、マンスリー・レビュー・プレスは、デ・プローグの著書『絶滅する帝国――パレスチナから燃える惑星まで、資本主義による生命への戦争』を出版する予定である。序文はジェイソン・ヒッケルが担当する。本書は、急成長するパレスチナ運動を、帝国主義と搾取に対する長期的闘争の基盤に据え、批判から権力への直接的挑戦へと移行するための戦略を提示することを目指している。

クリスは、アムステルダムのスターフィッシュ・ブックスから 2025 年と 2026 年にさらに 2 冊の著作を刊行する予定であり、きわめて多作な作家となりつつある。これらは三部作『De Grote Koloniale Oorlog（大植民地戦争）』の一部である。この三部作は、オランダのような国々が植民地時代の歴史を意図的に忘却し、植民地独立後に新植民地主義の触手を強めてきたことを告発する、記憶喪失に抗う試みである。

今日、ヨーロッパ社会の軍事化が進むなかで、クリスは、オランダの福祉国家が戦争国家へと変貌しつつある現状に抗するうえで、有利な立場に立っている。2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻を契機に、多くのヨーロッパ市民が戦争の現実に目覚める以前から、彼はデビュー作『ウクライナ・イン・ザ・クロスファイア』を執筆していた。この著作は、ウクライナのマルクス主義者ヴォロディミル・イシュチェンコが編纂した、同紛争に関する最初期の本格的左翼分析として、書籍として刊行された。

クリスという人物の最も魅力的な特徴の一つは、未来への強いこだわりである。世界は、富者と貧者、権力者と無力者によって分断されるべきではなく、変化は可能だと信じる者と、そう信じない者、そしてし

ばしば変化を妨げようとする者によって分けられるべきだと、彼は主張する。富と権力の不平等は彼の思想の核心にあるが、それ以上に重要なのは、世界を階層構造から平等主義へと変革したいという強い意志である。「私たちは傷だらけの世界を受け継いでいる」とクリスは言う。「しかし、傷は同時に開口部でもある。その開口部を通して、私たちは呼吸し、見、そして行動するのだ」。